

有用微生物群効果か

松山・杖ノ淵のテイレギ再生

2019年1月7日（月）（愛媛新聞）

f シェア

文字



テイレギが復活し、笑顔を見せる杖ノ淵ていれぎ保存観光協会の渡部介専務理事（中央）ら＝2018年12月18日午前、松山市南高井町

ほぼ全滅状態から1年で復活一。全国名水百選「杖ノ淵」（愛媛県松山市南高井町）近くの水路で昨シーズンほぼ姿を消していた市天然記念物の水草・テイレギが、今期は一転して元気に生育している。長年育ててきた住民らは新たに自然環境を整える活動に着手しており、地域の代名詞ともいえる植物の再生劇に「うれしい限り」と喜びに沸いている。

杖ノ淵でいれぎ保存観光協会（安川敬三会長）によると、テイレギは刺し身や高級料理の添え物などに使われる水草。10メートルほどの水路で通常7月ごろに植え付け、11月ごろには水中で緑色の葉を広げる。ここ5年ほど、夏の猛暑や葉を食する巻き貝の一種カワニナの増加などで生育不良が見られたほか、2017年は藻類の付着も目立ち、全滅に近い状態となっていた。

「地域の宝がないのは寂しい」ー。安川会長の妻ひろ子さん（70）が、イチゴ栽培で活用した乳酸菌や酵母菌、光合成細菌などを含むEM（有用微生物群）を、テイレギ栽培にも使えないか、認定NPO法人地球環境共生ネットワーク（東京）県理事の野本千寿子さん（71）に相談。昨年10月末に微生物を練り込むなどしたEMのブロックを等間隔で水路に投入すると、テイレギの葉にたかっていたカワニナが分散され、1カ月ほどで生い茂るようになったという。

同12月中旬には、透き通るような水路に3列で約150株が元気に揺れていた。住民らが試食すると、つんと鼻に抜けるような独特の辛みも健在だった。

野本さんは「EMには蘇生力があり、自然本来の姿に戻してくれる」と強調。藻を取り除くなど栽培に長年汗を流してきた同協会の渡部介専務理事（81）は「最初は半信半疑だったが、再生に光が見えた思い」としみじみと語った。

松山東雲短大の松井宏光名誉教授は「EMがどれほど作用したかは分からないが、復活したのは本当に奇跡的で良いことだ。テイレギがぴりっと辛いのは自己防衛法。元気に生育しているので食害にも耐えられるようになったのではないかと分析し「今後、競合する外来種のクレソンの駆除などにも必要だ」。住民らは「将来的にテイレギを入れた寒天作りなどにも取り組みたい」と夢を語っている。